のがれ、一心不亂の念佛者となり、諸國行脚に出しとなん、

〔奥州波奈志〕熊とり猿にとられしこと

これは、あや子がこゝに下りし、又のとしばかりのことなりき、二人組にて熊をとる狩人有しが、くまをもとむるとて、山にゆきしに、大木のもとに穴有て、其木にことゞく爪にてかきし跡の有しをみつけて、壹人が是をとらばやといふを、ひとりはえきあらじ、たしかに猿なるべしとて、くみせざりしかば、歸りつれど、はじめにとらんといひ出し人は、とかく心すまで、我壹人行てとらむとていでたりしが、其夜かへらざりしかば、たしかに猿にとられつらんと思ひて、外に人ふたりをたのみて、三人づれにてゆきて、口の穴をふたぎ、熊とりのしかけにして、長柄の鑓にてつきころしつ、中に入てみたれば、昨日來りし人はとられてくはれたりと見えて、著たる横さしと帶計穴の中に有て、何もなし、皆猿の食盡したる也とぞ、その猿は九尺計有しと聞し、すべてさるといふものは、大食成物にて、また食するものなき時は、いく日もくはでをる物也とぞ、山にすむ獸はさとのものとこと也、をかしきふしなきことながら、大食の次にかきつ、

〔醍醐隨筆上末〕一飛驒の奥山に入て狩するに、猿の數々なきさはぎぬる、いかなる故ぞと見居たれば、むかふの大木の梢に鷲のすみけるが、猿の子をつかみ取てさきくらふなる、親猿にや有けむ、殊にすぐれてもだへかなしみけるが、後大木の葉かげよりねらひよりて上るに音もせず、友猿四五十つゞきたり、先懸の猿とびかゝり鷲の足にとりつけば、四五十の猿聲をあげてひたひたと取つゝ、足にも翅にも蟻のごとくつきたれば、鷲も多力の鳥なれ共、こらへず地へ落てけり、つたかづらと云物を手々にもちて、一まきづゝまきてとびのく、すべて百ばかりの猿にまかれて、鷲は少しもうごかず、たはら物のごとくに成ぬ、猿共谷々へかへりにたれば、狩人これをひろい取て、人々に見せける、親猿いかばかりかなしくて、身のをき所もなきまゝに、かゝるはかりご